古典の〈無常〉と孤の宇宙――『方丈記』から考える

講演レジュメ（要点と引用文のみ）　荒木　浩

１、近年、日文研の web などで伝えてきたこと

1-1、［人コミュ通信 vol.19］2022.08.24

「「対話」が紡ぐ古典文学の魅力 ―荒木浩先生にお話をうかがってきました―」

https://www.nichibun.ac.jp/ja/topics/news/2022/08/24/s001/　　→QR コードで一覧を

……高校以来の私の古典への関心から、現在へ

→その後の海外と古典との出会いなど

・1984 年の中国→『人民日报』1984.09.25、孙东民記者

・1999 年のアメリカ（コロンビア大学）

・2007 年のインド

→荒木『古典の中の地球儀』（NTT 出版、2022 年）序論

→荒木「〈古典の中の地球儀〉という視界――日本古典文学研究と国際ネットワーキングのシンクロニシティ」（『跨境 日本語文学研究』15(1)、2022 年 12 月）

https://www.bcjjl.org/upload/pdf/bcjjlls-15-1-23.pdf

1-2、「2021 年のブッダ、『方丈記』、そして〈無常〉研究の未来へ」というエッセイ

日文研 newsletter、2022 年 7 月 14 日

https://newsletter.nichibun.ac.jp/research/1240/　　→QR コードで一覧を

1-3、「ソリッドな〈無常〉／フラジャイルな〈無常〉―古典の変相と未来観」

https://www.nichibun.ac.jp/ja/research/

→荒木編『〈無常〉の変相と未来観――その視界と国際比較』（思文閣出版、2025 年）

1-4、日文研 newsletter 最新号（2025 年 3 月 3 日）

「パリとピラミッドのシンクロニシティ――弥生の終わりに想うこと」
https://newsletter.nichibun.ac.jp/messages/2002/?id=250303

→QR コードで一覧を

２、「四方」四季という伝統と構想

〇日本古典文学が四方四季の邸宅と庭園を描く伝統。

・10 世紀の『うつほ物語』

・典型的な『浦島太郎』（中世のお伽草子）の竜宮城

まづ東の戸をあけて見ければ、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き亂れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。

南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂には、卯花や、まづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蝉の声、夕立過る雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。

西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、ませの内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、まはぎが露を分け分けて、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。

さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の木末も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らする気色かな。（岩波文庫『御伽草子』、絵巻の画像は国立国会図書館蔵『浦島太郎』［室町末期-江戸初期］［写］→同デジタルコレクションで閲覧可）

・現実の住まいとしての高陽院（かやのいん）

※太田静六『寝殿造の研究』（吉川弘文館、1987 年）、小野謙吉『日本庭園―空間の美の歴史』（岩波新書、2009 年）、

○『源氏物語』六条院の四方四季？

※荒木『かくして『源氏物語』が誕生する』（笠間書院、2014 年）参照。

→寝殿造りでは実現不能な「四方四季」

３、四方四季と隠者性

○『方丈記』から――鴨長明のプラネタリウムへ

（以下『方丈記』は、荒木『方丈記を読む――孤の宇宙へ』法蔵館文庫、2024 年より）

ここに、六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べる事あり。いはば、旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蚕の繭をいとなむがごとし。これを中ごろの栖に比ぶれば、また百分が一に及ばず。とかく言ふほどに、齢は歳々に高く、栖は折々に狭し。

その家のありさま、世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めてつくらず。土居を組み、打ち覆ひを葺きて、継目ごとに懸金を懸けたり。もし心にかなはぬ事あらば、やすく外へ移さむがためなり。そ

の改めつくる事、いくばくの煩ひかある。積むところ僅かに二両、車のちからを報ふ外には、さらに他の用途いらず。

いま、日野山の奥にあとを隠してのち、東に三尺余の庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南に竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚をつくり、北に寄せて障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を画き、まへに法花経を置けり。東のきはに蕨のほとろを敷きて、夜の床とす。西南に竹の釣り棚をかまへて、くろき皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに琴・琵琶各々一張を立つ。いはゆる折琴・継琵琶、これなり。仮の庵の有様、かくのごとし。

その所のさまを言はば、南に懸樋あり。岩を立てて水をためたり。林の木ちかければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら、跡埋めり。谷しげけれど、西晴れたり。観念のたより、なきにしもあらず。

春は、藤浪を見る。紫雲のごとくして西方に匂ふ。夏は、郭公を聞く。語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は、蜩の声、耳に満てり。空蟬の世をかなしむ楽と聞こゆ。冬は、雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

もし念仏もの憂く、読経まめならぬ時は、みづから休み、身づから怠る。さまたぐる人もなく、また、恥づべき人もなし。ことさらに無言をせざれども、独り居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒をまもるとしもなくとも、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波にこの身を寄する朝には、岡屋に行きかふ船をながめて満沙弥が風情をぬすみ、もし桂の風、葉を鳴らす夕には、尋陽の江を想ひやりて源都督の行ひをならふ。もし余興あれば、しばしば、松のひびきに秋風楽をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。芸はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめむとにはあらず。ひとり調べひとり詠じて、みづから情を養ふばかりなり。

また、ふもとに一つの柴の庵あり。すなはち、この山守が居る所也。かしこに小童あり、ときどき来りて、あひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを伴として遊行す。かれは十歳、これは六十、その齢ことのほかなれど、心をなぐさむること、これ同じ。或いは茅花を抜き、磐梨を採り、零余子をもり、芹を摘む。或いはすそわの田居にいたりて、落ち穂をひろひて、穂組をつくる。

もしうららかなれば、峰に攀ぢのぼりて、はるかに、ふるさとの空をのぞみ、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるに障りなし。歩み煩ひなく、心遠くいたるときは、これより峰つづき炭山を越え、笠取を過ぎて、或いは石間に詣で、或いは石山を拝む。もしはまた、粟津の原を分けつつ、蟬歌の翁が跡を訪ひ、田上河をわたりて、猿丸大夫が墓をたづぬ。帰るさには、折につけつつ、桜を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の実をひろひて、かつは仏にたてまつり、かつは家土産とす。

もし夜しづかなれば、窓の月に故人をしのび、猿の声に袖をうるほす。叢のほたるは、遠く槙のかがり火にまがひ、あか月の雨は、自づから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峰の鹿のちかく馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或いはまた、埋み火をかきおこして、老いの寝覚めの友とす。恐ろしき山ならねば、梟の声をあはれむにつけても、山中の景気、折につけて

尽くる事なし。いはむや、深く思ひ、深く知らむ人のためには、これにしも限るべからず。

→荒木「序〈キャラクター〉と〈世界〉の大衆文化史」（荒木浩・前川志織・木場貴俊編『〈キャラクター〉の大衆文化 伝承・芸能・世界』KADOKAWA, 2021 年）でウンベルト・エーコと「プラネタリウム」の話題を。

※荒木「序」は下記 KADOKAWA サイトから試し読み可。
https://www.kadokawa.co.jp/product/321910000168/
『日文研大衆文化研究叢書 全 5 巻序論集』（日文研オープンアクセス）でも
https://nichibun.repo.nii.ac.jp/records/7820

４、長明の都・世界・宇宙――独り住むこと

おほかた、この所に住みはじめし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに、五年を経たり。仮の庵も、ややふるさととなりて、簷に朽葉ふかく、土居に苔むせり。自づから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居てのち、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽くしてこれを知るべからず。たびたび炎上に滅びたる家、またいくそばくぞ。ただ、仮の庵のみ長閑けくして、恐れなし。ほど狭しといへども、夜臥す床あり、昼居る座あり。一身をやどすに不足なし。寄居は、小さき貝をこのむ。これ事知れるによりてなり。雎は、荒磯に居る。すなはち人を恐るるが故なり。われ、また、かくのごとし。事を知り、世を知れれば、欲はず、趨らず。ただ、しづかなるを望みとし、うれへ無きを楽しみとす。

惣て、世の人の栖をつくる習ひ、必ずしも事のためにせず。或いは妻子・眷属の為につくり、或いは親昵・朋友の為につくる。或いは主君・師匠、及び財宝・牛馬の為にさへこれをつくる。われ、今、身の為にむすべり。人の為につくらず。故如何となれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。縦ひ広くつくれりとも、誰を宿し、誰をか居ゑん。

夫、人の友とあるものは、富めるを尊み、懇ろなるを先とす。必ずしも、情あると、淳なるとをば愛せず。ただ、絲竹・花月を友とせんにはしかじ。人の奴たる物は、賞罰はなはだしく、恩顧あつきを先とす。更に、はぐくみあはれむと、安くしづかなるとをば欲はず。ただ、わが身を奴婢とするにはしかず。いかが奴婢とするとならば、もしなすべき事あれば、すなはち己が身をつかふ。懈からずしもあらねど、人を従へ人を顧みるよりやすし。もしありくべき事あれば、みづからあゆむ。苦しといへども、馬・鞍・牛・車と心をなやますにはしかず。

今、一身を分ちて、二つの用をなす。手の奴、足の乗、よく我が心にかなへり。身心の苦しみを知れれば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。使ふとてもたびたび過ぐさず。物憂しとても心をうごかす事なし。いかにいはむや、常にありき常にはたらくは、養性なるべし。なんぞいたづらに休み居らん。人をなやます、罪業なり。いかが

他の力を借るべき。衣食のたぐひ、また同じ。藤の衣、麻の衾、得るにしたがひて肌を隠し、野辺のおはぎ、峰の木の実、わづかに命を継ぐばかりなり。人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、疎かなる報を甘くす。惣て、かやうの楽しみ、富める人に対して言ふにはあらず。ただ、わが身ひとつにとりて、昔・今とをなぞらふるばかりなり。

夫、三界は、ただ心ひとつなり。心もし安からずは、象馬・七珍もよしなく、宮殿・楼閣ものぞみなし。今、さびしき住まひ、一間の庵、みづからこれを愛す。自づから都に出でて、身の乞匂となれる事を恥づといへども、帰りてここに居る時は、他の俗塵に馳する事をあはれむ。もし人、この言へる事をうたがはば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を楽ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の気味もまた同じ。住まずして誰かさとらむ。（『方丈記』）

５、世界の四方の景観と宇宙――『方丈記』とラ・ロトンダの比較へ

→白幡洋三郎編『『作庭記』と日本の庭園』（思文閣出版、2014 年）所収、
荒木「四方四季と三時殿―日本古典文学の庭と景観をめぐって―」、横山正氏の示唆も

６、『方丈記』の終わりに

「孤の宇宙」、嘘、偽悪、眠れない夜、など
※益田勝実「偽悪の伝統」（『火山列島の思想』）→講演の抜粋あり

https://hosei.ecats-library.jp/da/repository/00024808/nbs_97_p40.pdf

→荒木「日本文学における夢文化の拡がりと非在――その諸相をたどる」（豊田由貴夫・睡眠文化研究会編『睡眠文化論』第５章、淡交社、2025 年所収）

そもそも、一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに三途の闇に向かはんとす。何のわざをかかこたむとする。仏の教へ給ふ趣きは、事に触れて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。いかが要なき楽しみを延べて、あたら時を過ぐさむ。

しづかなるあか月、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひて言はく、世を遁れて山林に交はるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、汝、すがたは聖人にて、心はにごりに染めり。栖はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、持つところはわづかに周利槃特が行にだに及ばず。もしこれ、貧賤の報のみづからなやますか。はたまた、妄心のいたりて狂せるか。

そのとき、心、更に答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏両三遍申して已みぬ。

時に、建暦の二年、弥生の晦ころ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これを記す。
方丈記